

「日本国家の起源 五島列島に実在した高天原」

岡山市 村山三枝子

―父の書について―

父が二十年の歳月をかけてまとめた「日本国家の起源」を紹介する場として、今回この様な機会を与えて下さいました越中哲也先生のご配慮に、心より厚く御礼申し上げます。

父、松野尾辰五郎は、大正五年福江市江川町で生まれ、平成八年十二月に東京で八十才の生涯を閉じました。

経歴としては、旧制五島中学を卒業後、三井楽の嶽小学校での代用教員を経て、半年弱の兵役後上京。警視庁に職を得て国内留学という形で東京外語大華語部で中国語を学びながら、中国要人の通訳・警護を担当。戦後は国鉄を定年まで勤め上げました。

極く平凡な人生でしたが、唯一の心残りとは、昭和五十三年に自費出版して日の目を見ないままの此の本の行く末でした。私としても、これを埋もれさせてはいけない、せめて国会図書館に登録することだけでもしておかねばと、今回の復刻版製作をしたわけです。



五島の権現岳「これぞ天ノ迦具山である」(松野尾氏著書)

この本の内容としては、

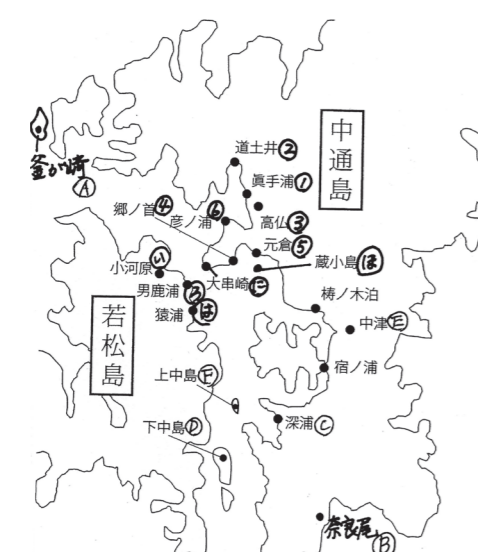
- (一)、古事記・日本書紀の神代篇の伝承は、歴史的事実を反映しており、弥生時代の五島列島での出来事である。
- (二)、記紀の神代篇の神々の原型は、日本に稲作・弥生文化をもたらした中国からの渡来人である。
- 稲作文化は「稲作の先生」によって全国に広められた。福江島のチャンココ踊りは、その稲作の伝播役であった。
- (三)、高天原は、地上にあった「神々(初期の渡来人)の地域」で、現在の福江島

ている。「日向」をヒムカノではなくヒムカヒノと訓むことを鍵にして、禊の場所の推定に道が展げ、中通島と若松島の間若松瀬戸であると断定する。

ここで陸の六神、海の六神、左右の手の玉飾りからの神々が化成するのであるが、その解明方法の中から一例をあげてみる。

『道乃長乳齒神は、投げ棄てた御帯に化成した神だという。記伝には、

『道乃長乳齒神、万葉に遠き道を、「道の長手」と多く詠める、長乳は即ちこの長手にて、同言なればなり。又書紀には「道乃」という言なく、ただ長乳磬ノ神とあれば、乳も道にて、道の長道か、御名の由は、帯の状道の長手に似たればなるべし』即ち、長い帯の状態が、遠い遠い単調な一本道の如きものであるところから、この神の名が生れたのである。それを表わしているのが「道土井」である。言うまでもなく道土井は道が遠いことをあらわしているのである。』



『正に驚天動地である』とは父本人の言ですが、記伝の説明と五島列島の地図が一分のスキもなくピッタリと合っています。父が熱望したように、多くの方々の目に

である。
(四)、「天孫降臨」は、福江島漁津ヶ崎から発進し薩摩の笠沙岬へ到着したことをいっている。

等々の考察が示されている。
更に五島列島の地名や地形が、古事記伝の説明と、さらには神道の祝詞と符号することを多くの例をあげて述べている。

古典・歴史学・宗教学・民俗学等の広範な勉強、なかでも本居宣長翁の古事記伝については、翁の没後門人ともいえるのではないかと思えるほどの打ち込み方で、本人も『記伝の解釈を食傷するくらい徹底的に引用している』と述べている。

父の多くの見解のうちより今回は二つを取り上げてみる。

- (一)、木の国は肥前である。
『今日の常識では、何人も木の国は紀伊ノ国であると言っているのである。ところが古代における木の国は、肥前の杵島・鹿島を言うものであった。鹿島地方の古社寺調査に、「多羅岳神は須佐之男命の御子五十猛命也」とあり、この五十猛命は記伝の説明にもあるように大屋毘古神のことである。
- 須佐之男命が熊成の峯に暫く居たことがあるが、その熊成の峯というのは杵島岳を言う。そうしてみると父子共に、肥前のこの附近に住んでいたことがあったわけである。
- のちに大國主神と呼ばれることになる大穴牟遲神が、意地悪な兄弟たちに追われて逃げ込んだ大屋毘古神のいた木の国なるものは、多羅岳一帯であることが判明した。
- ここからは諫早・長崎を経て福江島は目睫の間である。』
- (二)、伊邪那岐命は若松瀬戸で禊払いをした。
その場所に関して、記では「竺紫の日向の橋の小門の阿波岐原」となつ

風信

○十二月一日、今日より師走、年の瀬である。其角は「年の瀬は水の流れ」と言い、それに答えて唯七は「あした待たるる其の宝船」と答えている。さて私は「あした待たるる其の何」でしょうか。

○己を、あまり知らない人は、其の任につかない方が良いでしょうね。ラジオが歌っていました。「京都大原三千院 国にやぶれた男が一人……」

○江戸時代の長崎年中行事抄を見ていたら、十二月は実に行事が多かった。十二月朔日・早朝より、川渡りとして餅を賣りに来る。其の声かまびすし、又、節季候・恵美須とて下人ども家々に回り来る。

八日、釈迦悟道の日とて臘八の供養粥あり。十三日正月はじまりとて家々鱈をつくり相祝す。
廿二日より廿八日ごろまでの間、家々餅つきあり、桂もちを大黒柱につく。又新婦を抱えて「白入れ」の行事あり。廿九日餅つかず。

廿四日、家々酒を入るる事を忌む。大災を防ぐ為なり。

廿八、九日神棚・荒神様・佛前全てに正月の飾りを用意す。
この日より、幸木を玄関に懸け、手かけの台を造る。親戚や妻の実家に鏡もち・塩鯛を取りそろえ贈る。妻の実家夫妻健在なれば鏡もち二かさねを贈る。

晦日、家々「すすはらい」をすませ、重箱・雑煮・屠蘇酒を用意す。商家はすべての集金を終え家に帰りて会席す。

○戦前の十二月と言えば忠臣蔵の義士の討入り。クリスマスに除夜の鐘と色々と行事あり多忙、とある。長崎かくれキリシタンの行事書をみると「ナタラ・ごさんまの事あり」と記してあるが此の行事は今も伝承されているのでしょいか。

○十二月二十日は冬至、一年中で昼が一番みじかい日。カボチャを食べ柿湯に入ると難をさけると言う。

○長崎純心大学博物館研究第一七号として私(越中)の最近の小論を編輯し「長崎におけるコミュニケーションの研究」と題して発行して下さった。内容は長崎の通事(詞)達が「ことば」を通じて政治・文化の交流に尽した事。長崎の料理・美術工芸・古陶磁の事を平易な入門書として記している。(書店販売は無いので御希望の方は本会事務所まで(電話八二二一―一五四〇))

○平成二十三年は一月五日(水)午前十時より開所。新年の第一回長崎学講座は十七日(月)午前十一時より開講いたします。

○良き新年を御迎え下さいませ

事務局一同

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一―一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

